過去の暴力行為と暴力への潜在的態度との関連

○荒井崇史

(追手門学院大学心理学部)

キーワード: 暴力, 暴力に対する潜在的態度, 潜在的連合テスト (IAT)

The Relationship between the past experience of violence and the implicit attitude toward violence.

Takashi ARAI

(Faculty of Psychology, Otemon Gakuin University)

Key Words: violence, implicit attitude toward violence, implicit association test (IAT)

問題と目的

暴力は悪いこと, ネガティブなこと, 不快なことと意識的に理解していても, なぜ我々は暴力を振るうのか。この問いに対して, 本研究では暴力への潜在的態度に注目し, 暴力と不快概念との潜在的な連合と暴力行為との関連を検討する。つまり, 暴力は悪いこと, ネガティブなこと, 不快なことと意識的に認識されていても, 潜在的な態度では暴力に否定的ではない可能性があるためである。これに関して, Snowden, Gray, Smith, Morris, & MacCulloch, (2004) は, 犯罪者を対象とした研究で, サイコパシー得点の高い殺人者は, それ以外の犯罪者と比べて, 暴力と不快概念との潜在的な連合が弱いことを示している。Snowden et al (2004) の研究は, あくまでも犯罪者を対象としているが, これが人間に普遍的な傾向であるのならば, 犯罪者でなくとも暴力と不快概念の潜在的な連合が弱いほど, 暴力行為を行うと予想される。なお, 本研究では, 併せて山脇・山本・熊谷・大淵 (2013) の攻撃 IAT を用いることで, 暴力への不快さと攻撃的な自己概念とのどちらが暴力行為と関連するのかを検討する。

方 法

実験参加者: 関西の私立大学の男子大学生 38 名 (平均年齢 20.53 ± 1.64 歳)。なお, 川上・佐藤・吉田 (2010) に基づき, IAT 課題の誤答率が 30% 以上の 1 名は分析から除外した。**実験計画:** 暴力経験 (有 vs. 無) の 1 要因実験参加者間計画。**実験材料:** 潜在的態度の測定には潜在的連合テスト (Implicit Association Test: IAT: Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を用いた。**(1) 暴力 IAT** 対象カテゴリは, Snowden et al (2004) を参考に, 「暴力的」カテゴリと「平和的」カテゴリとを用いた。各対象カテゴリの刺激語は, 大学生, 大学院生 45 名 (男性 26 名, 女性 19 名) を対象に予備調査を実施し, 暴力的と評価された 6 語と, 平和的と評価された 6 語を採用した。属性カテゴリは, 川上他 (2010) から「快」カテゴリと「不快」カテゴリの刺激語を使用した。**(2) 攻撃 IAT** 山脇他 (2013) の作成した IAT 課題を用いた。**(3) 質問紙** 実験参加者の属性情報 (学年, 年齢等) のほか, 過去 5 年以内に人を殴った頻度と過去 5 年以内に人を叩いた頻度について, 「1: 一度もなかった」, 「2: 一度あった」, 「3: 数度あった」, 「4: 何度もあった」の 4 段階で評定を求めた。**実験手続き:** 実験は大学構内の実験室にて実施した。実験の流れは, 実験内容と倫理的配慮について説明し, 実験参加への同意を得た後, 暴力 IAT と攻撃 IAT 課題とを行い, 最後に質問紙への回答を求めた。なお, 暴力 IAT と攻撃 IAT の実施順序は, 参加者ごとにカウンターバランスをとった。**実験実施時期:** 2014 年 7 月 21 日から 9 月 15 日

結 果

実験参加者 38 名について, 「5 年以内に人を殴った経験」

が「一度もない」, 「一度ある」と回答した者を殴った経験なし群, 「数回ある」, 「何度もある」と回答したものを殴った経験あり群とした。また, 「5 年以内に人を叩いた経験」も, 上記の方法で群分けした。群分けの結果, 殴った経験なし群 28 名, 殴った経験あり群 10 名, 叩いた経験なし群 14 名, 叩いた経験あり群 24 名となった。暴力 IAT 及び攻撃 IAT は, 川上他 (2010) を参考に基準化手続きをとった上で, IAT 効果量を算出した。なお, 暴力 IAT 効果量は, 値が正の方向に大きいほど, 平和的と快 (暴力的と不快) の連合が強いことを, 攻撃 IAT 効果量は, 値が正の方向に大きいほど, 自己と友好的 (他人と攻撃的) の連合が強いことを意味する。

次に, 過去の暴力行為 (殴る) の有無を独立変数に, 暴力 IAT と攻撃 IAT の各々の効果量を従属変数に, 1 要因実験参加者間分散分析を行った。その結果, 暴力 IAT でのみ統計的に有意な差が見られ, 人を殴った経験のある群 ($Mean = 0.49$) は経験のない群 ($Mean = 0.65$) と比べて, 暴力 IAT の効果量が統計的に有意に小さかった ($F(1,36) = 6.47, p < .05$)。なお, 攻撃 IAT の効果量には統計的に有意な差は見られなかった ($F(1,36) = 0.81, n.s.$)。また, 過去の暴力行為 (叩く) の有無を独立変数に, 暴力 IAT と攻撃 IAT の各々の効果量を従属変数に, 1 要因実験参加者間分散分析を行った結果, いずれの IAT 効果量でも統計的に有意な差は見られなかった (順に $F(1,36) = 1.90, F(1,36) = 2.24$, いずれも $n.s.$)。

考 察

本研究の結果, 過去に他者を何度も「殴った」経験のある者は経験のない者と比べ, 暴力と不快概念との潜在的な連合が弱いことが示された。一方, 「殴った」経験の有無で, 攻撃 IAT に統計的に有意な差は見られず, 過去の「叩いた」経験の有無によって, 暴力 IAT, 攻撃 IAT のいずれでも統計的に有意な差は見られなかった。これらの結果から, 「殴る」というより強い暴力を過去に何度も振ったことのある者は, 暴力が不快であるとする潜在的態度が弱い可能性が示唆される。Snowden et al. (2004) の研究を含めて考えると, 特に暴力性の強い行為を振るような場合, その根底には暴力への潜在的な不快さの欠落が関与しているのかもしれない。

引用文献

■Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Journal of Personality and Social Psychology, 74, 1464-1480. ■川上直秋・佐藤広英・吉田富二雄 (2010). 心理学研究, 81, 437-445. ■Snowden, R. J., Gray, N. S., Smith, J., Morris, M., & MacCulloch, M. J. (2004) The Journal of Forensic Psychiatry & Psychology, 15, 620-641. ■山脇望美・山本雄大・熊谷智博・大淵憲一 (2013). 社会心理学研究, 29, 25-31.

謝辞) 本研究は, 和田佳奈子氏が追手門学院大学大学院心理学研究科に提出した修士論文を, 本人の同意を得て, 加筆修正したものである。ここに記して感謝申し上げます。